第七十二回卒業式が、このような形になりましたことに心苦しく申し訳なく思います。生徒の皆さんの健康を最優先に考えながら、卒業という門出を精一杯お祝いしたいという思いで、この形での開催となりました。御了承いただければと思います。

改めまして、第七十二期生の皆さん、卒業おめでとう。そして、深い愛情で卒業生を支えて来られた保護者の皆様、御卒業、おめでとうございます。

卒業生の皆さんは、伝統あるこの延岡高校で、仲間と支え合い、高め合い、充実した高校生活を送ってこられました。その内容の濃い三年間に対して、校長として心からの敬意を表します。

特に、今年度は創立１２０周年を迎えました。この記念すべき年に在籍したことを思い出と誇りにしてほしいと思います。そして、１２０年間に渡って本校の営みを築いてこられた一人ひとりの先輩たちに思いを馳せ、伝統の重みを今後の人生の力に変えてください。

本校の伝統中でも、変わらず脈々と受け継がれてきたのが、校訓の「自治」の精神です。ある研究機関が、社会人としての成功に、高校時代のどんな活動が影響しているかを調べたそうです。それによると、最も強い相関関係を示したのは、文化祭でした。つまり、文化祭の活動において、考えの異なる人たちの意見をまとめてひとつのものを作り上げていく作業が、社会で必要とされる様々な力を培う、というのです。

ここに、伝統としての萌樹祭の意義が証明されています。本校の萌樹祭は、その内容の濃さと完成度の高さで多くの人を魅了してきました。しかし、そこに至るまでの準備と当日の運営には、たくさんの人たちの陰ながらの努力があります。様々な段階において、意見の衝突や価値観の違いを乗り越えて、形あるものに結晶させるその努力こそが皆さんを成長させ、将来の社会人としての力を身につけさせているのです。

ここで、卒業生の皆さんに私からの最後のメッセージを贈ります。それは、これまで何度も繰り返していますが、「本を読み、人に会い、旅に出でよ」であります。

まず、本を読むという行為は、文字から知識を吸収することです。新聞であったり、雑誌であったりしてもよいのですが、ネット情報ではなく、自ら求めて得られた、いわば自分の

脳の形となるインプットです。

　次に、人に会う。それは、インプットからアウトプットへつなげることを意味します。すなわち、人に会って自分の考えを話し、自分の考えを確認することです。同時に、相手の考えを聞くことで、互いの考えが深まり、よりよいアイディアに生まれるのです。

　最後に、「旅に出でよ」とは、現場に身を置くことです。言い換えれば、肌で感じたことを大事にすることです。その際、すぐに納得できるときもあれば、違和感を覚え、立ち止まってしまうこともあるでしょう。違和感は、脳内に問いが生まれ、エネルギーが湧き上がってきている証しです。そして、そのエネルギーこそが、次の行動に移る原動力となるのです。

　繰り返します。「本を読み、人に会い、旅に出でよ」皆さんのこれからの人生において、この三つが何度も繰り返されることを期待しています。

　私事ですが、三年前に母校に高校卒業以来帰ってきました。そして、この三月末、定年を迎えます。教師としての最後の三年間を、卒業生の皆さんと共に過ごせたことを誇りに思います。皆さんとのこの三年間の活躍は素晴らしいものでした。その日々を併走できたことは、私にとって教師冥利に尽き、最後の輝く日々となりました。心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

　終わりに、卒業生並びに本日ご一緒いただいた皆様のご多幸を祈念して、式辞といたします。

令和二年　三月一日

宮崎県立延岡高等学校　　校長　宮野原　章史